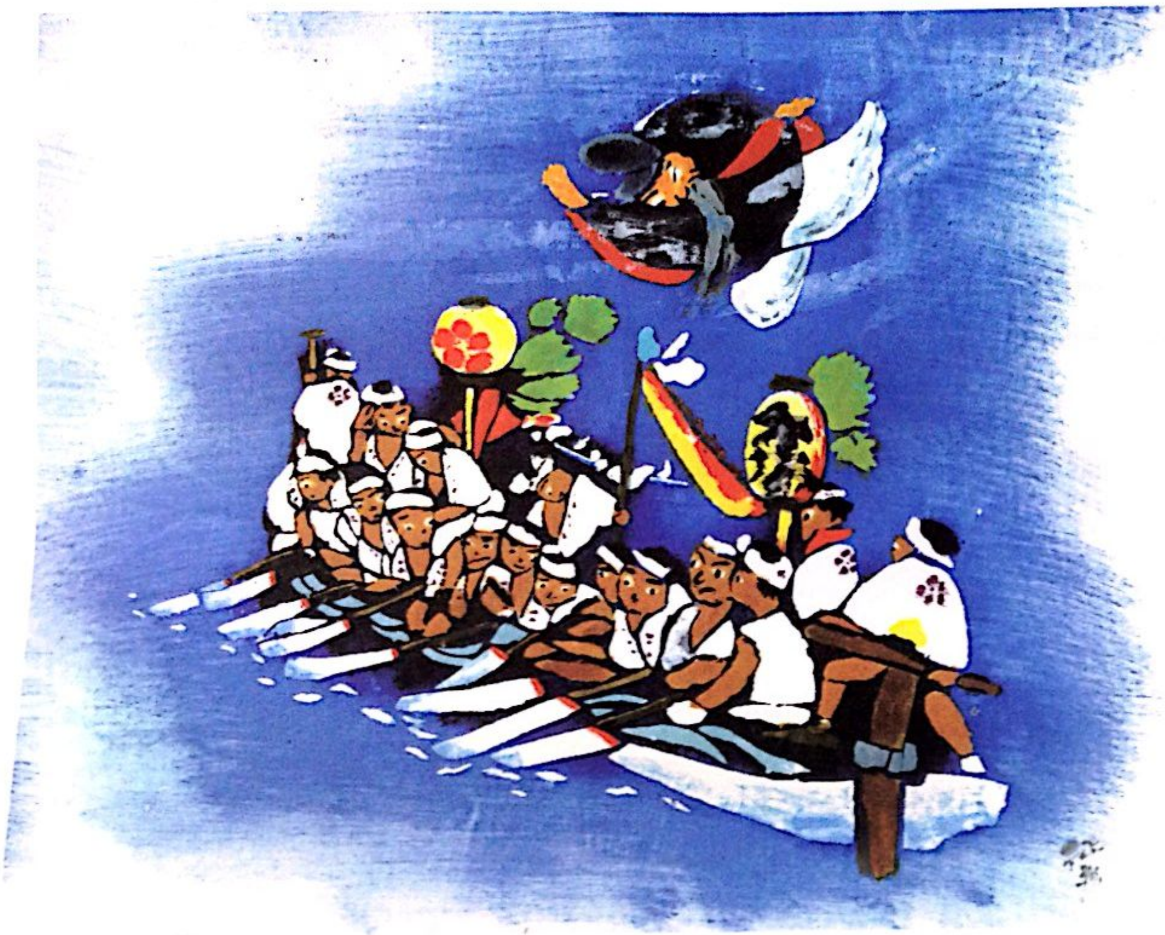
田島 征彦 ⑦

絵と文

小学生たちと絵本づくり



おのころ島（淡路島）へ引っ越してきて、今までにない経験をした。2度も、小学校の子どもたちと一緒に絵本をつくったことだ。1度目は、京都府で国民文化祭があった2011年、丹後半島の伊根町で「民話の祭典」があった。伊根町に伝わる浦島伝説を、町立本庄小学校の子どもたちと話し合い、15枚の絵を2、3人ずつに別れ、約半年かかって描き上げた。ぼくは、瀬戸内海から日本海へ20回以上も、日本を横断しなければならなかった。その甲斐あって、素朴だが、力強い「とこよのくにのうらしまさん」は完成した。（今、くもん出版から販売されている）

さて、今回は、大阪に住んでいる末娘のなの子の子どもが通っている大阪市立豊崎小学校の創立100周年に合わせて、全校の子どもたちと絵本をつくることになった。学区の周りに、目ぼしい民話などはないが、総合的な学習の時間に能楽体験をしている学校なのだ。能は千年以上も歴史がある世界最古の演劇である。能の先生は、大阪の天満宮に祭られ、天神祭に馴染み深い菅原道真公を描いた「雷電」という能が、絵本にするにはよろしかろうと提案された。

「雷電」の内容を読んでびっくりした。大宰府に流され無念の死を遂げた道真公の亡霊が、怨みをはらさんと狂い、仏前の石榴をかみ砕き大炎を吐きかけ暴れまわる。結末は、ありがたい千手陀羅尼の功徳により鎮まるというものだ。子どもたちの楽しい絵本づくりには向いていない。

そこで、ぼくは考えた。身に覚えのない罪に陥れられたり、いわれのないイジメに苦しむ大人や子どもたちは現在でも、たくさんいる。苦しみ恨み怒りで、ずたずたになった人の心を、どのように和らげてあげられるだろうか。これを絵本のテーマにしよう。

子どもたちの意見を聞きながら、「怨念のため雷（鬼）になった道真公が、豊崎小学校へ降ってきて、イジメに苦しんでいる少年と友達になる。そして、学校の子どもたちとも心を通わせることで、菅公さんも心が穏やかになって、天神祭の中へもどってゆく」という内容になった。

丹後半島の小さな小学校と違い、大阪のどまん中にある豊崎小学校であるが、都会から子どもが減って、1学年1クラスだ。それでも150人の子どもたちが8人ずつに別れて、73㌢×146㌢（見開き2㌻分）の大きな画面に楽しそうに描いている。丹後でもそうだったが、大きな画面へ思い切り描くことで、勢いがあり、動きのある絵になるのだ。たくさんの子どもたちが、思い思いに描くから、筆遣いが乱れて、画面がきたなくなる。ちょっと色彩音痴の子がびっくりするような色を塗っている箇所もあるが、極端に縮小されること（絵本の原寸は25㌢×50㌢）で、画面のきたない乱れ、色彩も落ち着いてくる。少量出版で印刷された絵本「かんこうさんがふってきて」は素晴らしい仕上がりになった。

ぼくも裏表紙に型絵染を1枚、入れさせてもらった。

（絵本作家）

＝毎月最終火曜日掲載